



札幌東支部

金坂 肇

Hajime Kanesaka

「税理士の仕事はAI・RPAに奪われる！」

このような議論は、もともとは2013年にオックスフォード大学の研究者が発表した研究成果に端を発したものであるが、その直感的なインパクトの大きさゆえ、様々なメディアで今なお取り上げられている。これに対してはさまざまな方面から、「人間が考える部分の仕事は残る!」「創造性のある仕事はなくなる!」という具体性に欠ける反論が大真面目に出ている。

翻って、本稿はTKCの「かいほう」への寄稿であるから、TKC会計人の原点である飯塚毅先生がご存命だったら、この問題に対してどのような回答をされるか、少し考えてみた。

とはいっても、筆者があとどれだけ勉強をし、経験を積んだところで飯塚先生には到底およびもつかないことは十分承知している。せめて、飯塚先生の著作・講演の中に手がかりがないものかと思っていたところ、飯塚毅講演集18『TKC実地講習』という講演の中で、飯塚先生がTKCシステムの構築に伴う決算の自動化について、事務所職員（税理士有資格者）とのやりとりのお話をされている場面があった。

要約すると、次のような内容である。

飯塚先生は、これからは決算書、附属明細書、申告書一式をすべてコンピュータで出力し、決算事務をなくすという話を職員にした。すると事務所職員である税理士有資格者が、「決算が自動化されるとなると、あれだけ一生懸命勉強してやっと税理士になったのに、われわれの仕事はコンピュータに取り上げられてしまうのですか?」という懸念を持ち、所長である飯塚先生のもとに相談にやってきた。

そこで、飯塚先生は、その職員に対して、今後の若手税理士の生きる道を次のように語られている。

「第一に、法人や個人の所得が正確に計算できる、くらいのところまではコンピュータがやっちゃうぞ。だからそこらんとおまんま食おうなんて大体太い。コンピュータの手が届かないほどの税法の専門家になれ。その最短距離は比較税法である。多くの税務署員は日本税法しか知らない。所長が過去20数年間、600回～700回全部勝ってきたというのは、日本税法の中だけをついていたのではなく、外部から比較法学的に日本の税法を眺めていたから、討論すれば必ず勝つんだよ。まずはなんでもいいから一か国、日本とアメリカ、日本とドイツなど、コンピュータの手が届かないほどの比較税法をやいなさい。

第二は、コンピュータから出てきた資料の前に、2時間くらいは関与先にお説教できるくらいにならなければダメだ。そして帰るときにはがっさりと頂いて帰る（笑）。そういう意味での顧問先に対する経営指導能力をしっかりと持つのであれば、コンピュータ時代といえどもお前たちは絶対に食いつぶれないんだ」。

この講演は昭和48年（1973年）3月20日の講演であり（筆者はそもそもこの世に生まれてすらいない）、それから46年が経過している。そのころからは格段の情報技術の進歩があり、TKCのソフトも凄まじい進化を遂げているが、この言葉から飯塚先生の卓越した先見性に改めて驚くとともに、この言葉が今なお、われわれ若い税理士への励ましでもあるように感じる。

結局、時代が変わり、環境が変わっても、税理士として生き残る道は飯塚先生が示した方向性に変わりないのではないかと。

一人ひとりの税理士が、新しい技術に興味を持ち、積極的に自身の業務に取り入れること、そしてそれ以外に、自分の軸・強みというものをもつことを常に考えることである。

現代の税理士を取り巻く環境が目まぐるしく変わるなかで、かつて飯塚先生が残された言葉を謙虚に受け止め、日々研鑽を積みながら業務に取り組みたいと考えている。